NPO Japan Alpine-Flora Preservation Association's Bulletin.

NPO法人 日本高山植物保護協会 JAFPA

2021.1.1　No.93

●観察山行を通して高山植物と向き合う
●Touch!ふれる・楽しむ・好きになる
●会津駒ケ岳と檜枝岐村
●小屋番の一人言
●生物多様性ホットスポット
●葦毛湿原観察会
●会員からの便り
●事務局からのお知らせ
●高山に咲く花
●高山植物一口メモ

朝日を受けて　（写真提供：中村光吉　三つ峠にて）

観察山行を通して高山植物と向き合う

専務理事本部長：中村光吉

本部事務局の新しい運営体制がスタートしてまもなく、新会長選任の課題が生じ、元筑波実験植物園園長で現日本植物園協会会長の岩科司先生にお願いすることができました。

そして春先からは新型コロナウィルス感染症問題で、集会の自粛など乗り越えるべき新たな運営課題が生じました。新会長のフィールドに出ての自然観察会を組み入れたような総会を開催したいという意向もあり、乙女高原を利用した野外での総会を計画することになり、無事開催できました。

観察山行もまた、低山日帰りの計画を立て実施する予定でおりましたが、新型コロナウィルスの感染拡大の背景もあって、参加予定された方々にお願いして、協会行事としてでは無く自主的なメンバーによる任意の観察会に変更して実施させてもらいました。当日天気にも恵まれて暑さは有りましたものの湿原の爽やかな風を受けての観察を行った後、移動してもう一ヶ所沢沿いの大きな自然公園で植物と景観を楽しみました。

参加された方々とも直ぐに打ち解け、岩科先生の全体の自然界に亘る話を伺える価値有る時間でした。先生は学識も高い方ですが、何よりフィールドでの実際の観察が大切と常々言われていることが参加者にも伝わったと思います。

この様な機会を様々に持ち会員同士の交流の中で連帯感持って、高山の植物の保全、保護という大変な事業ですが、当たって行ける力に成ると思います。

昨年北岳でタカネマンテマを見ました。花が過ぎ種子の形成と思われる個体は直立していて、おそらくは種子の散布に少しでも優位に成ることから獲得した形質だと思われます。あの北岳山頂付近の強い風、マイナス数十度の冬の世界を超えて毎年花を咲かせ世代を更新する姿には、私達人間が経済優先で地球のエコシステムを壊し、それが今我々に返って来ていることを考える良い機会になります。

Touch! ふれる・楽しむ・好きになる ～鳥海山と遊佐町～

法人会員　遊佐町企画課　佐藤　修

鳥海山は山形県と秋田県の県境にあり、標高2,236m、日本海に裾野を広げる独立峰です。独立峰であるが故に裾野が広く、歩くコースによって地形・植生ともに違った表情を見せてくれる奥深い山です。

三崎海岸沖からの鳥海山

近年は、年代・性別を問わず多くの登山客のみなさんに訪れていただいております。特に７月中旬から８月上旬にかけては、雪解け後の短い夏の間に多くの高山植物が咲き乱れ、見る人を楽しませてくれます。

今年度（令和２年度）は、公衆トイレで苦労した年でした。例年ヘリ空輸をお願いして資材運搬し開設作業を行っていますが、全国的な長梅雨の影響でヘリが飛べず、当初６月下旬の作業予定が、夏山シーズンも終わる８月下旬になってしまいました。

また、新型コロナウイルス感染症の影響で、山頂の御室小屋・七合目の御浜小屋が営業を見合わせたことによって、清掃等の常時管理体制が取れないことも重なり、登山客の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

長坂道から山頂を望む

鳥海山周辺の環境保全と交流人口の拡大を目的に、麓の4自治体（秋田県由利本荘市・にかほ市、山形県酒田市・遊佐町）で鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会を立ち上げ、環境・産業・観光・教育等様々な分野で連携し活動しています。その成果が認められ、平成28年9月、「鳥海山・飛島ジオパーク」として日本ジオパークの一つに認定されました。

鳥海山は、大陸からの季節風が、日本海の湿気を含んで大量の雨や雪を降らせます。その水分が、火山活動の繰り返しによって溶岩が層となっている土壌に浸透し、数年～数十年かけて湧水となって地上に湧き出し、麓の人々の生活に多くの恵みをもたらしています。

本町の中だけでも、ほぼ湧水100％の清流である「牛渡川」、フォトスポットにもなっているエメラルドグリーンに輝く「丸池様」、砂浜から湧水が湧き出す「釜磯湧水」等多くの見どころが存在します。

鳥海山湧水池「丸池様」

湧水は日本海沖の海底でも湧いており、夏にはミネラル分を多く含んだ岩牡蠣が採れ、食の面でも私たちを楽しませてくれたりと、まさしく５感で遊ぶことのできるエリアとなっています。

鳥海山・飛島ジオパークは「Touch！ふれる・楽しむ・好きになる」をキャッチフレーズに活動しています。皆さんも鳥海山とその裾野でTouch！して、自然の恵みを直に感じていただければ幸いです。

七合目鳥海湖付近のお花畑

会津駒ケ岳と檜枝岐村

法人会員　檜枝岐村観光課長　平野　勝

会津駒ケ岳は、標高 2,133m のなだらかな高層湿原に大小の池塘が点在し、周囲 360 度のパノラマとハクサンコザクラ（檜枝岐村では南京小桜と呼んでいます）に代表される高山植物が咲き誇る天上の花畑です。地元の檜枝岐村民は会津駒ケ岳を「母なる山」と崇拝し、弘仁 7 年（816）山頂付近に駒形大明神を祀りました。会津駒ケ岳は昭和初期までは世人に知られない処女的霊峰でした。

ハクサンコザクラ

昭和 30 年に地元丸屋旅館の主人、星福太郎氏が山頂付近に避難所として夏の間だけテントを張りましたが、昭和 33 年の伊勢湾台風によりテントは吹き飛ばされてしまいました。丸屋旅館は昭和 38 年に木造造りの小屋を新築し「駒の小屋」と名付け、福太郎氏の孫である星廣一氏（のちの第 7 代檜枝岐村長）が山小屋の営業を開始しましたが、昭和 60 年の火災による焼失を機に丸屋旅館は「駒の小屋」の経営を離れ、昭和 61 年に檜枝岐村が小屋を再建し現在に至っております。

全国的に登山ブームとなった昭和 30 年代後半から少しずつ登山者が増加し、山頂湿原の荒廃が徐々に進んできました。檜枝岐村では、湿原喪失の危機感から昭和 40 年代から木道敷設を毎年実施してきました。しかし、標高 2,000m の脆弱な生態の高層湿原では、少しの踏み荒らしや大雨で湿原の裸地化が徐々に進み、木道の整備だけでは湿原の回復は見込めない状況になってきました。そこで村では、平成 5 年から湿原裸地化回復と木道敷設工事を同時並行で 10 年以上の歳月をかけ施工し、山頂湿原の保護に努めてきました。平成 14 年には駒の小屋に隣接して公衆トイレ（し尿を搬出するカートリッジ方式）を整備しました。

駒の大池

平成 19 年には日光国立公園から分離独立した「尾瀬国立公園」が誕生し、会津駒ケ岳も公園地域に編入され、山頂付近の高層湿原は特別保護地区に指定されました。これは「母なる山」である会津駒ヶ岳を必死に守ろうとした先人達の努力の賜物であると思っています。しかし、国立公園になったものの国の整備は一向に進まず、再び湿原裸地化の恐れがあり一刻も早い保全が必要であると判断した村は、平成 29 年「会津駒ヶ岳南京小桜基金」を設立し、山頂湿原全体の保全活動を開始しました。今回は、国県の補助金だけでなく、クラウドファンディングや一般の寄付により募金を集め、保全事業を実施することとしました。これまで総額 1,700 万円を超える、温かい協力金をいただいております。

整備された木道

自然環境が厳しい山頂湿原は、整備に係る期間が夏場の数か月で、作業が中々進まない状況から、村の若者も積極的に保全作業に参画してくれています。今を生きる私たち檜枝岐村民は、これからも会津駒ケ岳を「母なる山」として見守り、今後も保全活動を続けてまいります。

保全活動の内容について尾瀬檜枝岐温泉観光協会 HP http://www.oze-info.jp/ をご覧ください。

小屋番の一人言

法人会員　涸沢ヒュッテ　山口　孝

涸沢に初めて足を踏み入れたのは、1961年で中学3年生の夏休みでした。それからは、高校、大学と8年間ほど休みの度にお手伝いと称して入下山させていただきました。

卒業してから2年ほど、旅行代理店でサラリーマン生活を体験した後、単身で6か月ヨーロッパを渡り歩き、1972年に涸沢で働き始めました。

今年で48年目のシーズンとなりますが、体力、気力が年々衰えてくるのをひしひしと感じる年となってきました。

1972年の当時は、小屋番の一番大事な仕事は「歩荷（ボッカ）」です。山小屋の全ての食料は毎日、横尾から背負って荷揚げしてました。

朝食後、掃除をして9時にヒュッテを出て10時に横尾に着いて、全員に荷を配分して、10時半に出発して、11時半に本谷橋で握り飯をとり、12時に本谷橋を出発して、14時にヒュッテにたどり着いてました。

1987年39歳、60kgを背負って

背負子はすべて自分の手作りで、各自の体に合った物で背負ってきました。

荷をおろす休憩ポイントは、本谷橋とソーダーラップ（前穂の見える所で、ソーダーラップのビンを置いて飲んでいた）の2か所だけです。それ以外は立ったままで、荷棒で支えながら肩を休ませ、20回深呼吸したら歩くを繰り返しながらひたすらヒュッテを目指します。

当時の小屋番の価値観の目安は、「お前、何kg背負えるの？」ということだけのまさに体力勝負の時代でした。でも不思議なもので、根性とやる気があれば、一週間ほど歩荷を続けると、自分の体重ぐらいは背負えるようになるのです。

夏山シーズンの1か月間、毎日歩荷を続けると当然飽きてくるので、替え歌を歌ったり、登山者と物々交換したりと、気分転換しながら生きてきました。

1980年代になるとヘリが飛ぶようになりますが、少しでも雲行きが怪しくなると物輸は不可能となりました。

私共小屋番は「雨が降ろうと槍が降ろうと、握り飯2個で背負ってくる」という自信があり、本気でヘリと勝負してきたこともありました。

レスキューもしかり。どんな現場でもヒュッテまでおろしてくるという信念をもって出かけてました。全ての現場に背負子をつけて気合を入れて。大変きつい毎日でしたが充実した日々でした。

現在、山小屋はヘリの荷上げが一番重要課題で、ヘリなしでは山小屋経営はできません。

今シーズンはコロナ禍でどこの山小屋も大変な苦境に立たされています。天候不順、災害もあり、登山者の入れ込みはかなり落ち込み、このままでは来シーズン以降閉鎖となる山小屋も出てくることになるかもしれません。

山小屋は大変な状況になっていますが、「どうせ生きてゆくなら前向きで明るく生きてゆきたい」という昔の小屋番の心意気で乗り越えたいと想う今日この頃です。

花咲き誇る盛夏の涸沢

紅葉に染まる秋の涸沢

生物多様性ホットスポットとは？ ～固有種の絶滅危惧～

山本義人

父島の花の写真提供は「公益財団法人東京都公園協会」様

生物多様性ホットスポットとは、維管束植物の固有種が1500種以上と多様性が高いが、しかし自然植生の70％以上が破壊されている地域のことです。2000年に世界で25地域がホットスポットに認定され、その後追加修正があって現在は36地域で、日本もその一つの地域に認定されています。

独立行政法人国立科学博物館は、開館130周年記念研究プロジェクト「生物多様性ホットスポットの特定と形成に関する研究」の一環として、平成21年に日本固有の維管束植物のホットスポット地図を作成し、植物が多様な地域トップ10がどこかを明らかにしています。

①小笠原父島　②屋久島　③小笠原母島
④奄美大島湯湾岳　⑤夕張岳　⑥北岳
⑦アポイ岳　⑧八ヶ岳　⑨赤石岳　⑩早池峰山

小笠原父島は火山性の島嶼で、標高は326mしかありませんが、生態系は多様です。長い年月をかけて環境に適応・分化してきた一例としてシソ科ムラサキシキブ属があげられます。ムラサキシキブ属の祖先が島にたどり着き、オオバシマムラサキ、シマムラサキ、ウラジロコムラサキの3種に分化したと考えられています。生育場所は異なり、オオバシマムラサキは小笠原各島に生育していて日当たりを好みますが、シマムラサキは父島、兄島のやや湿った低木林内に、ウラジロコムラサキは父島、兄島の乾燥した岩石場に生育していて、葉が小さく裏面に銀白色の毛が密生しています。これら3種はいずれも雌雄異株で、島嶼環境における雌雄性分化の特徴を有しています。

ムラサキシキブ属ウラジロコムラサキ

シマムラサキは環境省絶滅危惧1A類、ウラジロコムラサキは1B類に指定されています。

人が住むようになり、開発行為や外来種の持ち込みなどで本来の自然が破壊されてきています。ツツジ科ムニンツツジも絶滅危惧1A類で、自生個体は父島に1株だけで、他に東京大学付属小石川植物園が植え戻しを行った植栽株が数十株生育しています。植物園で栽培研究された当初は失敗続きだったものが、父島の土を用いたことで成功できたとのことです。成長した株の根元にキノコが現れ、菌類との共生関係が明らかになりました。ラン科植物とラン菌の関係と同様に、ツツジ科植物と共生する菌類もいるということです。

ツツジ属ムニンツツジ

夕張岳は海底が盛り上がることで形成された標高1,668mの山です。夕張前岳、ガマ岩、夕張岳本峰などの岩峰は、固い緑色片岩などからなり、風衝地と雪崩地を形成し、これらの岩峰に支えられた緩やかな地形には蛇紋岩が露出しています。夕張岳の高山帯に生育する植物は、氷河期後の温暖化によって高山で生き延びた遺存植物として、さらに緑色片岩の岩峰や超塩基性の蛇紋岩土壌という特殊な環境に適応して、形態的な分化・進化をすることで、夕張岳にだけ分布する固有植物として残存しています。夕張岳の蛇紋岩地に生育するユウパリソウは八ヶ岳や白馬岳、礼文島に自生するウルップソウの変種で絶滅危惧1B類です。

ウルップソウ属ユウパリソウ

葦毛湿原観察会 2020年8月26日

本部事務局　山本義人

■当初計画

新型コロナウイルス問題で高山への宿泊登山を自粛する状況下にあり、低山への日帰りの観察山行を計画しました。会員の皆様におかれても、常日頃は低山や里山などでの活動をされていて、各地域での観察や保護活動に取り組まれていることを鑑みて、今回はそのような研修の機会になればと考え、豊橋市葦毛湿原から湖西連峰神石山へのハイキングコースでの観察山行を計画しました。

■計画変更

新型コロナウイルスの感染症問題は続いていて、お盆休みも外出を控えた方々が多く、会員の皆様におかれても自粛されていることを考えると、JAFPA のイベントとして観察山行を主催することは中止とし、あらためて各自の自主的活動として、会員が同じ日に同じ場所で観察を行い、そこで出会って情報交換するといった観察会を試みることを伝え、7 人の参加者が同意されたので実行しました。

■観察会当日

厳しい残暑が続いていて、新型コロナ対策以上に熱中症対策をも心掛ける必要があり、ハイキング登山は取りやめて、午前中は葦毛湿原で観察を行い、昼食後に移動して、この時期に咲く希少ランが見られるという森を散策することにしました。

10 時に参加者が顔合わせのため集合、体温測定して平熱の確認をさせてもらい、日程の連絡を行い、葦毛湿原の観察資料を配布した後、お互いに自己紹介を行ってから湿原の観察を始めました。

シラタマホシクサは開花が始まったばかりで湿原上部では咲いていましたが、木道周辺ではまだこれからといったところでした。

咲き始めたシラタマホシクサ

湿原内にはミズギボウシやサワシロギク、トウカイコモウセンゴケなどが咲いていました。4 種のミミカキグサが自生していますが、この時期多く見られたのはホザキミミカキグサで、幸運にもヒメミミカキグサを観ることができました。葦毛湿原をよく訪れていて保全活動にも参加している近在の会員が参加してくれ、三脚に望遠鏡を固定して咲いている場所を見せてくれたのでやっと見つけることができるといったとても小さい花で、木道から 2～3m ほど離れた場所なので肉眼で探すのはとても困難でした。

毎日のように葦毛湿原を訪れている主ともいうべき人たちが何人かいて、この日偶然お三方にお会いできお話もさせていただきました。前年にはトキソウの盗掘騒ぎがあり、この年にはサギソウ園芸種球根の投げ込み騒ぎがあったとのことです。

投げ込まれた球根から咲いたサギソウの花

葦毛湿原は豊橋市の管理地で、湿原保護のために「葦毛湿原観察の 4 つのマナー」を掲げています。

①ゴミを持ち帰りましょう

②湿原内に踏み込まない

・木道を外れて湿原内に入らないで下さい。

・写真撮影の三脚を湿原内に入れないで下さい。

③何も持ち出さない

・植物や昆虫を採取しないで下さい。

④何も持ち込まない

・外国産や他地域の植物や昆虫、園芸植物などを持ち込まないで下さい。

・ペット連れでの見学はご遠慮下さい。

■後日談

参加会員からは「サギソウ園芸種化や岩科会長の花の色と虫の関係は大変興味深く、楽しい 1 日でした」といったメールを、また会長からは「地元の植物に詳しい方たちを大事にしないといけないと思いました」といったメールをいただきました。

～会員からの便り～

伊豆諸島新産のキク科ヤマハハコ(広義)
植物地理・分類研究　68(1):59-61(2020)より

広義のヤマハハコには3つの種内変種が認められていて、狭義のヤマハハコ、ホソバノヤマハハコ、カワラハハコがあるが、これまでは伊豆諸島からはいずれの変種も記録されていない。大島自然愛好会の八木と小川は、2016年8月に伊豆大島の裏砂漠のスコリア上に点在する草地の際に群生していた広義のヤマハハコを発見した。形態的・生態的な2型が見出され、1つは、葉幅が1.5㎜内外と非常に狭く、側枝は短いか枝分かれをせず、9月に開花する型で、もう一つは、葉幅が5㎜程度で、側枝が頂枝より長く、8月に開花する型である。カワラハハコもしくはホソバノヤマハハコと類似しているものの完全には一致しない。

伊豆大島のヤマハハコ(広義)

また八木は三原山が噴火した1986年以前にも類似植物を観察していたことから、少なくとも30年以上前から生育していたものと考えられる。

以上は、前号で大島自然愛好会の活動及び大島の植物の現状についての記事を寄稿してくれた小川信正さんからの情報提供です。

(前号No.92-5掲載表の訂正をお願いします)

植物名	2000年	現在	原因
サクユリ	2万株以上	1千株未満	盗掘・キョン

事務局からのお知らせ

●支部活動

各支部ともに新型コロナウイルス禍での支部活動を自粛したことから、活動報告記事の掲載はありません。

●フォトコンテスト作品募集

山の自然の中で咲いている花の写真を募集します。花の咲いている自然への感動、出会えた花への感謝、貴重な瞬間をとらえた感激を共有させてください。
花のアップだけでなく、花と風景のコラボの写真もお願いします。貴重な写真を待っています。
・プリント応募：一人3作品まで
作品の大きさ：六つ切、または四つ切
・電子メール応募：一人2作品まで
作品の大きさ：縦横比3:4～2:3、画素数6～8M
・募集締切：令和3年2月28日
・審査委員：理事会メンバーから選出
入賞作品は総会で表彰するとともに、情報紙とホームページで紹介します。
応募に際して、花の名前、撮影年月日と撮影場所、氏名、会員番号、連絡先を記載してください。

●キャンペーンポスター事業

記事掲載した鳥海山、会津駒ケ岳、穂高・涸沢を題材にしたキャンペーンポスターを作成しますので、写真の提供を募集します。提供された写真はフォトコンテスト応募扱いとなりますので、応募要領は同じです。

●故白籏史朗前会長追悼文集

6名の会員から追悼文を寄稿していただき、追悼文集として編集を行いました。

●会員募集　いつでも入会できます。

・会費

一般会員　入会金　1,000円　年会費3,000円
法人会員　年会費　50,000円
賛助会員　年会費　10,000円
法人会員、賛助会員には入会金はありません。

・会費の振込方法

入会希望者はTELまたはE-mailでご連絡ください。
ゆうちょ銀行の払込取扱票を送らせていただきます。
会員には毎年1回年度初めに送らせていただきます。
振込先：ゆうちょ銀行　口座番号　00440-6-8293
・お振込みに際して　住所･氏名等をご記入ください。
銀行やコンビニでのATMによるお振込みもできます。
振込先：ゆうちょ銀行　〇四九店　口座番号008293
または、山梨中央銀行　県庁支店　口座番号493898

令和3年1月1日発行
特定非営利活動法人 日本高山植物保護協会
〒400-0806　山梨県甲府市善光寺2-11-8
TEL：055-251-6180
E-mailアドレス：info@npo-jafpa.or.jp
HPアドレス：http://npo-jafpa.or.jp

高山に咲く花

JAFPAFacebookgroup に投稿された写真の中から毎月１枚を選んで表紙ページに掲載しています。
今年５月から 10 月にかけて掲載されたものを紹介します。
大勢の会員の皆さんに Facebookgroup メンバーになっていただき、投稿をお願いします。

5月の表紙：ホテイラン（渡邉昭彦氏提供）

6月の表紙：シラネアオイ（須田善男氏提供）

7月の表紙：ショウキラン（古舘徳雄氏提供）

8月の表紙：チングルマ（亀島智英氏提供）

9,10月の表紙：タカネビランジ（植田憲弘氏提供）

●高山植物一口メモ　サラシナショウマ　（キンポウゲ科）

サラシナショウマ属は、北半球の温帯に 15 種の分布が知られている。日本には、サラシナショウマ、オオバショウマ、イヌショウマの３種がある。和名は晒菜升麻で、若芽や若い葉を煮て、水に晒して食用としたことによる。ショウマは、根茎を乾燥したものをいい、解毒、解熱、神経痛、頭痛に薬効がある。生育地は山地の樹の下、亜高山帯の草地などで、大形の多年草草本、高さ 40～120㎝で、茎は直立し円柱形で、長柄のある葉が互生する。茎頂の長い花柄に総状花序を出し、密に有柄の白い花を８～10 月につける。

南アルプス千枚岳直下の千枚小屋のサラシナショウマの群生地の一角に、朝霧にけむるひとむらのサラシナショウマは、一幅の絵にも勝るとも劣らないものでしたが、拙い私の写真では伝わらないのはいたしかたないものです。自然は何ものにも代えがたいものです。いつまでも「あの日の美しさ」が変わらないようにと願います。

（文と写真　大内京子）